

相馬の歴史を探求する

# 凸凹新聞

2023年  
10月号  
Vol. 2

発行：相馬凸凹学会



## 相馬の神社の謎と秘密(1)

### 凸凹地形にある 神社の特徴とは？

相馬を歩いてみて感じたことのひとつが、神社がとて多いな、ということだった。一方でお寺は津軽藩主代々の崇敬を受けた覚応院くらいしか見当たらず、少し不思議に感じたものだ。

凸凹地の神社は、台地の先端下部に入り口があり、登ったところに本殿があるのが特徴、と法政大学江戸東京研究センターの元センター長・陣内秀信先生に伺ったことがある。実際、相馬の神社も多くがそういう形式だ。もちろん例外もあるが、平らな土地にこつ然と建つ神社というのは珍しい。これは、水害のリスクが比較的高い凸凹地で、高い場所にあったほうが地域を見渡しやすし、住民が避難しやすいといった理由もあるようだ。対してお寺などは水源を守るという意味で谷地の川沿いなどにあることが多いそうだ。

### 川沿いから高台に 遷った五所神社

繰り返すが、例外があつて、凸凹地形といえどもすべての寺社がそのパターンに当てはまるとは限らない。

相馬でいえば、五所神社が例外的な存在だ。台地の上のやや平坦な場所に鎮座している。そこだけ盛土されたような特異な形状なのだ（もともと古墳なのではないか、という噂もあるようだが真偽は不明）。

それもそのはずで、この神社の宮はもともと下五所里見という岩木川沿いにあつたものだ。創立年月日は不詳だが、相馬に潜幸されていた長慶上皇崩御の大葬の際に権現社を建てたのが五所神社の始まりだと伝わる。ところが、たびたび水害によって流されてしま



五所神社

つたため、寛延年間（一七四八〜五一）に現在の場所（五所野沢）に遷して祀られるようになったという。

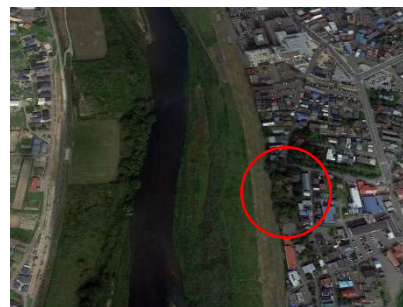
### 五所川原市と相馬の ただならぬ関係

五所神社にまつわる逸話はこれにとどまらない。里見にあつた祠が流されるたびに着いたのが、現在の五所川原市元町付近の川原だった。そのたびに相馬からの使者が持ち帰つたものの何度も同じ場所に流れ着くので、これは神意に違いないと、その場所に祠を安置することになったという。それが現在の元町八幡宮でこの出来事が五所川原という地名の由来だともいわれる。

八幡宮の由来書きによれば、万治三年（一六六〇）のころとされる。先述した寛延年間より一〇〇年以上も前ではあるが、もしかしたらそのころから何度も同じようなことがあつたのだろう。

そんな由来もあつて、相馬と五所川原市は現代になつてもさまざまな交流がはかられていた。いつしかその交流も途絶えつてしまったようだが、ちなみに、八幡宮（八幡神社）は全国でもっとも

赤〇のところが元町八幡宮。左に流れる川が岩木川（© Google Earth）



多い神社で、主祭神はその名のとおり八幡神（誉田別命）（ほむたわけのみこと）＝応神天皇）。対して五所神社の御祭神は久介迺智神（ククノチノカミ）という神様だが、もとは長慶上皇の大葬で祀られたのがはじまりだ。つまり、同じ皇統としてつながりがあるわけだ。相馬と五所川原市もかつてのように何らかの形でつながっていただければいいのにな、と思うのは私だけではない。

（文責：加賀新一郎）

【参考文献】  
相馬村誌編集委員会編『相馬村誌』（相馬村）、三浦稔「わがふるさと」新編弘前市史編集委員会編『新編弘前市史』（弘前市企画部企画課）

凸凹新聞  
2023年10月号 Vol. 2（2023年10月1日発行）

◆発行者  
相馬凸凹学会（代表・加賀新一郎）  
〒036-1592  
青森県弘前市大字五所字野沢41番地1  
（弘前市相馬庁舎内）  
電話：090-3102-6110（地域おこし協力隊）  
E-mail：souma.chiikiokosi@gmail.com

### 相馬凸凹学会のメンバー大募集！

相馬の歴史を研究し、語り合うメンバーを大募集しています。入会資格は一切問いません。相馬が好き、歴史が好き、相馬のことをもっと知りたいという人なら誰でもOK。学会といってもサークル的な集まりで、とくに規約もありませんので、趣味の延長として相馬の歴史や地形などを一緒に研究してみませんか。

# お岩木山の分身として 崇められた大石神社の謎

## 岩石を信仰していた 相馬の人

巨大な岩石をそのまま崇める岩石信仰は、動物、植物、樹木、滝、岩、月など、すべての自然物に靈魂的存在を認めるアニミズムとしてはありふれたものの一つである。日本における岩石信仰は、磐座としてそのまま古神道にとりこまれ、現代でも岩石を神体とする神社は日本各地に存在し、神道の一部となっている（諸説あり）。



大石明神祠堂

大噴火で岩木山から飛んできたというのである。「祖霊の住む山」として古くから崇められてきた岩木山から飛んできた岩石というこゝで、人々は大切に守ってきたそう

相馬地区にも信仰の対象になっている岩石があるのをご存じだろうか。紙漉沢の奥にある大石明神だ。山のたまり場夢想館前の道を、西へ三百メートルほど進み、右手に見える丘の頂上、りんご園の細い道の先にある。「ピラミッド型」岩木山型の高さ三メートル近い大石」の前に鳥居と祠がある。

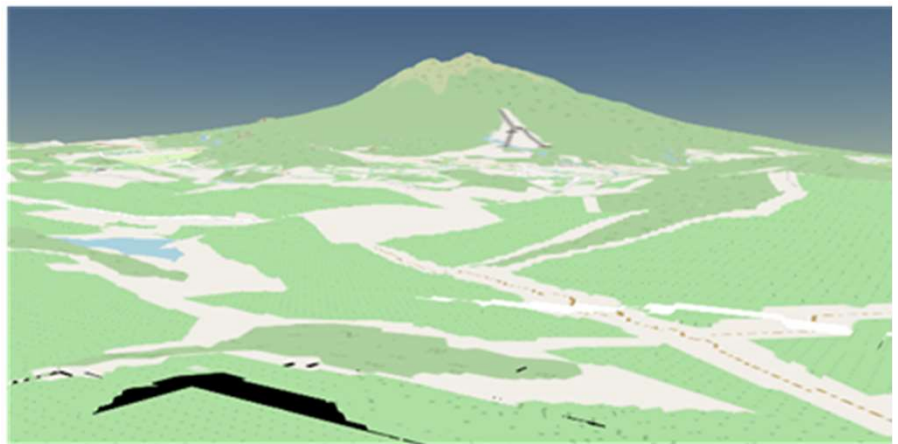
この岩石がどこからきたのか、いつからあるのかはわかっていない。言い伝えによると、太古の

また、津軽地方では、村の裏山のようなところに祠などを設けた「模擬岩木山」という遥拝所に見立てた場所に、参詣が体力的にも経済的にも困難な人が、岩木山の代わりに参詣する風習があった。現在は林の陰に隠れているが、「岩木山神社」と岩木山頂を見渡せる位置で、この祠堂を通して岩木山を拝んだ」ことから、相馬の人々は岩石そのものを信仰対象としたのではなく、人と岩木山をつなぐ「媒体」として祀っていたと考えられる。

## 皇族が参拝にきた!?

昭和十年（一九三五）八月から昭和十一年十二月まで、昭和天皇の実弟である秩父宮雍仁やすひと親王が弘前歩兵第三十一連隊第三大隊長として御在隊していた。在任中、隊の訓練のために大石明神周辺に訪れ、その際、上皇宮と大石明神に参拝したのだという。雍人親王が馬に乗ってきたことを紙漉沢町会の成田尚道さんは母親から聞いたという。

皇族が来るような牛馬の飼料の草刈場（まぐさ場）であったが、昭和二十年代までは、領界につ



CGによる大石明神からの眺め（〈c〉 ひなたGIS）

いて紙漉沢と国吉（東目屋）の間で紛争があり、領界をめぐって揉めたことから「モメ山」と言われていた。地図をみると、領界が複雑に入り組んでおり、揉めた名残がうかがえる。昭和三十年代には、祭りや遠足、運動会、スキーがおこなわれる行楽の地になった。当時、まぐさ場は男女の出会い場でもあったらしく、

とってつけたような縁結びのパワースポットと言われるようになった。その後、耕耘の機械化により、帯は急速にりんご園になった。おそらく園地拡大のときに「石工某がこの大石をうち砕こうとして大怪我をし、神威をおそれてこの祠堂を建立した」と伝えられており、りんご園の中にポツンと岩石が残る現在の姿が残っている。

## りんご作りで宿る アニミズム精神

大石明神の岩石信仰のように、相馬の人々は自然物すべてに靈魂が宿る感覚をもってきた。飛躍した話になるが、アニミズムの精神がりんご一つひとつ手入れし、手間暇かけて育てることにつながっているのかもしれない。（文責…穂坂修基）

### ●相馬凸凹学会とは

津軽平野の南端に位置し、台地と平地が入り組んだ凸凹地形の相馬の歴史を地形・地理・地名といった新たな視点も加えて調査・研究・記録するサークル。

### 【参考文献】

小館衷三『岩木山信仰史』小学館、鳴海恒男『相馬村史』津軽書房、金子直樹「岩木山信仰の空間構造—その信仰圏を中心にして」『日本人文地理学雑誌』  
協力：成田尚道さん